

科学論・科学技術社会論の視点を「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」に適用する——小西甚一を援用し、見えてくる文化受容の「漢文方式」から「資格（英語・博士号）方式」への転換 その十一

草 薙 太 郎

## 科学論・科学技術社会論の視点を「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」に適用する——小西甚一を援用し、見えてくる文化受容の「漢文方式」から「資格（英語・博士号）方式」への転換 その十一

### 草 薙 太 郎

本稿は全体として以下の構成を持つ論文シリーズの一部である。

#### 1. はじめに

##### 1-1 考察の主題と先行研究

##### 1-2 「技術官僚モデル」が当てはまる先行研究

##### 1-3 「技術官僚モデル」と「モード論」の関係を検討して今後の日本の文化受容のあり方を予測する

##### 1-4 「モード論」, 「技術官僚モデル」, 文化の授受方式の図式化

##### 1-5 中国, 韓国に比べ日本が近代化で先んじた理由を図式で説明

##### 1-6 「文学研究」を「科学」にするため「いわゆるいいがたきもの」の排除

##### 1-7 「科学」であろうとする「文学研究」が関連する「倫理」を中心にした様々な観点

##### 1-7-(a) アメリカのミクロ倫理

##### 1-7-(b) 日本のメソ倫理

##### 1-7-(c) 西欧のマクロ倫理

##### 1-7-(d) メタ倫理

##### 1-7-(e) 多文化主義と「テロ対策」が行動主義的政治哲学へ

#### 2. 科学論・科学技術社会論の視点での「データベース：米国シェイクスピア研究学位論文」の分類と考察

##### 2-1 「技術官僚モデル」から「モード論」へ

##### 2-1-(a) 「技術官僚」の教養が「モード論」で崩壊

##### 2-1-(b) 「モード論」で歴史感覚が崩壊

##### 2-1-(c) 文化の数理性, 音楽性追求が「知的財産」問題に

##### 2-1-(d) 西欧文化のマイノリティー迫害告発（多文化主義への底流）

##### 2-1-(e) 多文化主義, 文化的唯物論視点での「シェイクスピア現象」論

##### 2-1-(f) 「調査的面接法」による「シェイクスピア現象」研究

##### 2-1-(g) ホモセクシュアルが照射する「技術官僚モデル」から「モード論」への動き

##### 2-2 「技術官僚モデル」と「モード論」の共通項探究

- 2-2-(a) アングロサクソニズムについて
- 2-2-(b) 大陸西欧文化について
- 2-2-(c) キリスト教について
- 2-3 科学技術社会論の「シェイクスピア現象」への適用
  - 2-3-(a) 女性学傾向の社会論
  - 2-3-(b) (科学技術) 社会論
  - 2-3-(c) 政治学 (法学) 傾向の社会論
- 3. 終わりに

以上のうち以下を本稿に収録してある。

- 3. 終わりに

### 3. 終わりに

この論文シリーズの終わりにあたって、シェイクスピア論に小西甚一を何故導入したのか、また昨今の大学をめぐる事情、すなわち大学教員に博士号を取ることが求められ、学生に英語の資格を取ることが奨励されることになった事情をシェイクスピア論と絡めて何故論じようとしたのか、その理由を明らかにしたい。それには、次の小説の一節の引用が役に立つ。

No one could quite believe what was emerging. Surely it was a trick of the mist and light. No one in this age of telephones and motorcars could believe that giants seven or eight feet high existed in crowded Surrey.<sup>1)</sup> (訳：こちらに近づいてくるものを誰も信じられなかったのだ。これはもやと光線のいたずらに違いない。電話が通じ自動車が走るこの現代に、人口過密なこのサリーで、二メートルをゆうに超える巨人が歩いているなどと誰が信じられるだろうか。<sup>2)</sup>

実際は、それは巨人ではなく子供を肩車した男性であった。けれど、その男性は強姦魔という「巨人」としての扱いを受けることになる。行方不明になった子供を助け出した「子供を肩車した家族愛に満ちた男性」のイメージが「強姦魔の巨人」視され、その見方が警察に認められ、男性は逮捕され、家族は崩壊し、男性を愛していたヒロインともども、状況は悲劇に向かう。この原因は男性を「強姦魔の巨人」と誤解し、その信念を貫いて警察に男性を告発し続け

---

1) Ian McEwan, *Atonement*, (2001), Chapter Fourteen.

2) 小山太一訳、『贖罪』, (2003).

た少女にある。少女は成長して自分の誤解に気づき、自分のしたことの重大さに気づき、それからは贖罪の人生を送る。それが小説のテーマであり、題名の由来でもある。

遠くから近づいてくる存在が「子供を肩車した家族愛に満ちた男性」なのか、「強姦魔の巨人」なのかは、遠くにいるときは分からない。近づいて来ると、目に見えるものが前者であることが分かっても、今度は実態が前者なのか後者なのかが問題になる。少女の当初の誤解の罪は大きい。男性は後者と看做され、収監され、おりから第二次世界大戦が勃発して、懲罰召集のような形で戦地に送られる。

この小説のこの工夫には下敷きがある。英国紳士である將軍を怪奇小説の怪物視した少女の物語、ジェイン・オースティンの『ノーサンガー僧院』の筋立ての仕掛けである。これにちなんで、『ノーサンガー僧院』の一節を本の扉の言葉にしてある。『ノーサンガー僧院』の方は、「現代の英国に怪物などがいると思ったの、ばかだね」と言われてヒロインがただ恥ずかしがるだけで、どちらかといえば「めでたしめでたし」の終わり方である。『贖罪』はもっと深刻な展開になる。ヒロインが恥ずかしがる『ノーサンガー僧院』の、その「現代の英国」の意味が突き詰められ、「強姦の冤罪」が巻き起こす懲罰召集と贖罪としての看護婦志願によって国家とは何かを描き出されるのではないか。戦争という要素を導入したために、『贖罪』は戦後の英国の「新しい建国神話」創作の模索ではないかと思わせる。作品は子供劇で終わる。シェイクスピアを子供が演じる慣習と関係の深いヒロインの少女時代の創作の再演だ。考えてみれば、作品はこの演劇をやろうとして断念するヒロインの様子で始まる。その再演で小説が終わるのは、少女の演劇創作の模索が小説の主題の一つだからだ。同時に男性を冤罪で懲罰召集させた少女の贖罪は、それを小説化して恋人カップルの幸福な結末を望む創作活動と二重写しになっている。小説の終わりの再演については、子供の時間感覚で記憶が歪められシェイクスピア劇ほどの長さに思われていた作品が十分足らずで終わったという描写もある。このシェイクスピアへの言及は単に時間の短さの表現ではないと思う。

大英帝国の建設にシェイクスピア劇は関わり、戦後ナチスによる試練を経て、「現代の英国」が存続するための「古くて新しい建国神話」として『贖罪』が書かれたようにも思える。「強姦」に見えたのは「純愛」であった。シェイクスピアの『ルークリウス』に見えたものは『ロミオとジュリエット』であった。ここで「1-7『科学』であろうとする『文学研究』が関連する『倫理』を中心にした様々な観点」で論じ、小項目として「1-7-(a) アメリカのミクロ倫理」「1-7-(b) 日本のメソ倫理」「1-7-(c) 西欧のマクロ倫理」「1-7-(d) メタ倫理」と「建国神話」が深く結び付くことを指摘したい。

レイプされた女性の嘆きが共和国設立につながるという奇抜な発想の論考<sup>3)</sup>や、『ロミオとジュリエット』を、恋愛悲劇ではなく、ジュリエットをヒロインとし、遍歴の果てに英雄の死に辿り着くロマンスと捕らえる論考<sup>4)</sup>は、アメリカのマイクロ倫理の典型である。

個人としての女性がレイプされないマイクロ倫理は、確かにアメリカ合衆国の理念であり、アメリカのフェミニズムの論理である。また、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』のジュリエットにギリシャ・ローマ神話のヒロインの要素を指摘されれば、確かにその要素があるとも思える。しかし、こうした見方を奇抜と感じるのは英国など西欧のマクロ倫理に慣れ親しんでいるせいであろう。社会の中の恋人の役割は夫婦のように互いを自己犠牲を伴うほどに愛することである。けれどロミオとジュリエットは夫婦なのに恋人の印象が強い。それは恋人という、社会機能としてマクロ倫理に従いながら、やや個人として独立したマイクロ倫理の要素があるからではないか。「現代の英国」が存続するための「古くて新しい建国神話」として『贖罪』が書かれたと先述したのは、英国が尊重する「恋人の社会機能の確立」と「イギリス流個人主義」という、ややマイクロ倫理の気配の確認ではないか。

つまりフランス革命を無視したと評されるジェイン・オースティンの「ここはイギリス、しかも現代です」(だから怪奇小説のようなことは起こらない)と怪奇趣味の空想にふける少女を諷める言葉を作品の中で言わせることは、「現代の英国」への信頼感を再確認して、暗にフランス革命で激動するフランスとイギリス革命後の英国の違いを表現しているともいえるのではないか。フランス革命はカトリックからライシテへというマクロ倫理の変遷である。イギリス革命から王政復古への動きは清教徒革命のマイクロ倫理を経てマイクロ倫理の気配のあるマクロ倫理というイギリス流マクロ倫理の確認になる。

「新しい建国神話」ないし「近代英国の建国神話」模索の動きは、シェイクスピア論と深く関係する。というのは、先述したばかりの『ルークリース』『ロミオとジュリエット』についての二つの米国シェイクスピア研究博士論文の例にあるように、さらにアメリカも加え、英米のシェイクスピア論は英米の近代国家としての建国神話模索の動きとも解釈できるからである。

男性が受ける「誤解と贖罪」をテーマにしたこの小説の、引用した上記の一節は、本論文シリーズの「2-1-(g) ホモセクシュアルが照射する『技術官僚モデル』から『モード論』への動き」で論じたシェイクスピアのオーサーシップについての議論に重ねられる。

つまり伝統的なシェイクスピア像は「子供を肩車した家族愛に満ちた男性」に喩えられる。

---

3) Murray, Vicki Elizabeth Joan, *Shakespeare's "Rape of Lucrece": A new myth of the founding of the Roman Republic*, (2003). CR||291||1

4) White, Karyn Alease, *The romance of "Romeo and Juliet"*, (2003). CR||291||1

このイメージのように、子供たちがその作品を演じることが慣習になる（繰り返し指摘するように『贖罪』でも子供が演劇を演じることがテーマの一つになっている）「子供を肩車した『英国という家族』への愛に満ちた男性」であったシェイクスピアのイメージが、二十世紀には様々なシェイクスピア別人説によって「強姦魔の巨人」のような存在に変貌させられる。すなわち同時代の著名な思想家や詩人をゴーストライターに使った教養の低いプロデューサー的な存在にシェイクスピアは貶められ、文人としての尊敬度は皆無になってしまうものの、その作品群が英国と米国という世界に影響力を持つ二大国家をゆすぶったという意味において「知の強姦魔の巨人」視されてしまうのが、各種のシェイクスピア別人説であったともいえる。

ここで留意すべきは近づいてくる男との距離である。距離が遠いときは、「子供を肩車した男性」なのか「巨人」なのか分からない。その場合は両方の可能性を念頭に推測するのが妥当である。よく警察が事件、事故の両面から捜査すると言う。『贖罪』の場合も、起こったことは強姦事件にしても、犯人が恋人同士の突発事故のような和姦を誤解され、強姦魔と疑われて強姦の犯人に仕立てられた人物か、他に真犯人がいるのかが問題になった。シェイクスピア研究の場合も、決め手になる資料がないときは、各種あるシェイクスピア別人説のうち、無学なストラトフォードのゴーストライターを使った剽窃事件か、天才の作品執筆以外の文筆活動の資料が失われた結果の文学史上の事故に過ぎないのか、事件か事故の可能性のすべてを並行して考慮すべきという考え方も成立する。

ここで「2-1-(g) ホモセクシュアルが照射する『技術官僚モデル』から『モード論』への動き」で論じたシェイクスピアのオーサーシップについての議論の分類を振り返ってみよう。

論じたのは①ストラトフォード②ベーコン③十七代オックスフォード伯エドワード・ヴィア④セルバンテスの四人であった。このうち英国では①が伝統的に最有力であって、他はほとんど一笑にふされていた。ストラトフォード・アポン・エイボンの市内観光のためのホームページには②が間違いであることがかつては明記されていた。しかし、この記述は最近では消え、③の評価も次第に高くなってきている。一方、米国では米国シェイクスピア研究学位論文を見る限り②に熱い視線が注がれていた傾向がかつてはあった。現在では、あらゆる候補を否定せず、並列して論じる傾向が強まっている。

シェイクスピアのように英国の場合は自国のナショナル・ポエット（国家的詩人）で、米国の場合は、自国が科学技術とビジネスだけではない国であることを示す、いわば米国の文化的な存在証明ともなるべき存在となると、それを論じる言説は、理解社会学でいう二次モデル（国家の有り方を学者が論評したもの）ではなく、一次モデル（国家の有り方そのものを表現するもの）の傾向が出てくる。それに関連して、以下を引用して検討したい。

和辻は「尊皇の道」を清明心と慈愛と正義の三つに見るが、それらは結局、無「私」の天皇

とそれをめぐる個人の「私」の放棄に還元される[和辻(1943)<sup>5)</sup>]

もちろん、こうした論理がそのまま信じられていたわけではない。けれども、誰一人信じていなくても、社会を語る言葉としての一次モデルは個々の人間のふるまいを拘束する。とりわけ、近代社会は一次モデルがもつ反省機能をその内部に制度的にくみこみ、個人にそのモデルを教育する社会であるため、その拘束力は強い。<sup>6)</sup>

佐藤によれば和辻が哲学を語る言説は一次モデル(国家の有り方の表現)になる。佐藤は林羅山、荻生徂徠、伊藤若冲から明治維新後の教育政策担当者の言説や、国定教科書の記載などを並べ、天皇が究極の滅私奉公の存在であることが日本国の精神的な仕組み(それを語る言説が理解社会学でいう一次モデルになる)だという。それを語る佐藤の言説は二次モデル(学者の論評)である。

ここから観阿弥の出自が伊賀か大和かで梅原猛と表章が論争したことを考える。二人の議論が結局のところかみ合わなかった印象があるのは、梅原の言説は二次モデルのように見えて実は一次モデルだからではないか。

一次モデルか二次モデルか、つまり国家の有り方を直接語って影響力があるものか、それを学者が論評したものかの区別は、小説『贖罪』やシェイクスピア別人説で問題にした「建国神話創作の模索」か、そうでないかと重なるのではないか。観阿弥の出自が伊賀か大和かで梅原猛と表章が論争した議論がかみ合わない印象があることについていえば、梅原は常に日本国の「建国神話創作の模索」が念頭にあるのに、表章には(少なくとも当初は)それがなかったのではないか。

このことを掘り下げるために、シェイクスピア別人説を掘り下げてみよう。

英国では①が伝統的に最有力であったものの、③の評価も次第に高くなってきていると先述した。これは市民革命以後の近代国家としての英国の「建国神話創作の模索」が関係していると思う。現代「栄光の近代」への回帰の心情が英国内で強いのではないか。かつてシェイクスピアを礼賛して大英帝国を築き上げた。これまではそのストラトフォードアンとしての存在を疑わなかった。つまり①を採用して疑念なしに来た。その事情はマイケル・ドブソンの著書<sup>7)</sup>に詳しい。

そのシェイクスピアを詩聖(エイボン川のバード)として崇めるバードラトリーに陰りが出

---

5) 和辻哲郎、『尊皇思想とその伝統』、『和辻哲郎全集10』,(岩波書店1943)。

6) 佐藤俊樹、『近代・組織・資本主義—日本と西欧における近代の地平—』,(1993), pp.252-3.

7) Dobson, Michael, *The Making of the National Poet, Shakespeare, Adaptation and Authorship, 1660-1769*, (1992).

てくるとき、「子供を肩車した『英国という家族』への愛に満ちた男性」では飽き足らず、「強姦魔の巨人」のような存在を二重写しにする好み、もしくは好みを許容する傾向が出てくるのではないか。

その理由は色々ある。アメリカという科学技術立国でドライなビジネスを国の支えとする国の隆盛によって、それまでの精神文化を支えにしていた国々に「魂（あるいは良くも悪くも合理的でないもの）への渴望」が生まれるということではないか。DNAによる科学捜査が始まり、意外な人物が犯人であることが珍しくなくなり（DNA導入の科学捜査の初期には冤罪も多く発生した）、ただ温かい心で崇拜する対象だったシェイクスピアの人格イメージが変わり、その作品の真の著者が別人だったとしても、人々は驚かなくなった。

法隆寺を聖徳太子一族の怨念を封じ込める寺とする梅原猛の説が出て、その説そのものを事実として信じる人は少ないながら、日本人の聖徳太子イメージを一変させてしまった。それまで、英国人がシェイクスピアを崇拜してきたのと同様、ただ温かく日本人を家族のように包み込む日本仏教独特の和の精神の中心にいて、聖徳太子は仏教の守護者であった。その人格イメージの裏に、怨念が渦巻き血で血を洗う権力闘争が秘められていることを、一つの考えとして許容するようになった。そんなことをかつては絶対許容しなかったであろう日本人の心が変化して、そういうことがあったとしても不思議はないと思ひ、日本人は驚かなくなった。つまり聖徳太子にまつわる日本の「建国神話」が変化したのだ。

それにはナチスドイツの残虐行為も影響していると思う。第二次世界大戦の勃発時に、イギリスはナチスドイツに対して懐柔策をとっていた。ナチスがロンドンを爆撃する事態や、ユダヤ人を虐殺する事態を想定していなかった。戦後、確かにファシズムの残虐性は認識されたものの、まるでその反動のように様々な「偉人」が輩出したのではないか。英国に限ってもチャーチルからダイアナ妃まで、多くの人々から慕われ尊敬される人物がかなりの人数存在した。その人々が居る限り、シェイクスピアが尊敬すべき人物であることは揺るがなかった。（日本でも戦後の各界の「大物」が居る限り聖徳太子の地位は揺るがなかったのではないか。）英国ではダイアナ妃が無くなって以後、シェイクスピア別人説のうち③の十七代オックスフォード伯エドワード・ヴィア説が有力になってきた気がしてならない。

聖徳太子もシェイクスピアも「国家のフィクションとして疑ってはならない存在」であった面がある。ファシズムは人体実験に象徴されるように、国家にすべてを捧げることを強要する、マクロの技術者倫理の極端な形態である。戦後はその反省から主要国での民主化が進展した。それを技術者倫理で分析すれば、欧米はアメリカの重要度が増し、アメリカ型のミクロの技術者倫理が尊重される時代になった。日本でもソニーやホンダの創業者に象徴される一匹狼の技術者が尊重されるミクロ倫理の花盛り期を迎えた。

法隆寺を聖徳太子一族の怨念を封じ込める寺とする梅原猛の説も、梅原猛が『地獄の思想』



で戦後しばらくして登場し、歌舞伎の市川猿之助とともに、やがてスーパー歌舞伎の創設につながるマイクロ倫理尊重の一環としてもよいのではなかろうか。そうした文系の行動を科学技術の技術者倫理で捉えることへの批判があるかも知れない。けれど、梅原の著作の信憑性を支えるのは技術への観察力である。法隆寺論を支えるのは寺の建築や像を対象とした技術的な観察である。梅原の著作でほとんど異論がないのは円空論である。ものづくり大学の学長として建築や美術についての深い観察と職人魂への共感があって、それが梅原の論考の説得力の基盤だといっても過言ではない。スーパー歌舞伎の魅力の大きな要素に、日本の古来の神殿の千木(ちぎ)・鯉木(かつおぎ)などの大道具の正確な構築がある。

国家のために弱者を犠牲にする人体実験に象徴されるマクロの技術者倫理の極端な形態であるファシズムとの戦いで、人権や個人の自由を尊重するアメリカ型マイクロの技術者倫理の進展が、国家に限らず、あらゆる組織が持つナショナリズムの傾向の虚構の欺瞞性をあばいてきた。その中にバードラトリーも含まれるのではないか。

「耳の聴こえない現代のベートーベン」と呼ばれた佐村河内守という「作曲家」がゴーストライターに新垣隆という作曲家を使っていた問題もこのことに関連する。この問題が登場したとき、③のヴィア説の信憑性が増したと感じたのは私だけであろうか。耳が聞こえなくなっても作曲を続けたベートーベンという神話(もちろんベートーベン本人は佐村河内守と違って晩年耳が聴こえなくなったのは史実に近いものらしいものの、神話は史実かどうかとは必ずしも関係しない)は大衆を惹きつける。けれど、キャリアのあるプロの作曲家にとって、現代音楽はいざ知らず、ベートーベンのような古典派の曲を創る者にとっては、作曲は「心の耳」に聴こえている和声とメロディーの組み合わせを頭脳的に工夫するだけの作業に近くなっていて、必ずしも「実際の生物学的な耳」で確認する必要はない。「耳が聴こえないのに作曲した」という行為を、「至難の業」として評価するのはシロウトのみで、プロの作曲家にはあまりいないであろう。そうした大衆受けのする神話で自分を飾ることは、しかし出来あがった曲そのものに影響もする。

カミングアウトした新垣隆も力のある作曲家であって、その作品も好意的に受け止められる。けれど佐村河内守のプロデュースによって生み出された作品の迫力はないのではないか。作曲の腕はなくとも、佐村河内守の「悪の魅力」を付加するプロデュースの才能で作品の幅は広がっていた。これに関連して、シェイクスピアについて③がもう一つ信じられなかったのは、ヴィアが署名した詩作品にシェイクスピア作として世に出た作品の持つ「悪の魅力」がないからであった。ヴィアを新垣に、シェイクスピアを佐村河内に擬えれば、③も十分納得できる説に感じられる。

このことは梅原猛が柿本人麻呂刑死説を唱えたことと関係する。この問題は小西甚一が伊藤

博の説を紹介した「歌俳優」の考え方<sup>8)</sup>で決着している面がある。しかし、それでは梅原は承服しないであろうと推定されることを「2-1-(g) ホモセクシュアルが照射する『技術官僚モデル』から『モード論』への動き」で以下のように先述した。

梅原猛は根本的に「死を演じてみせる」感覚を否定する面がある。当時を「高コンテクスト」文化の世界（漢籍の素養によって死が「歌俳優」によって演じられることを享受者が不審に思わない世界）と見做して「欠如モデル」に近いコミュニケーション（一般に知られてない事実を説明する）を論文や著作で展開することはしない。

わかりやすく言えば「柿本人麻呂は心の底から絞り出す魂を揺るがす歌をつくる人だから、漢詩の知識を多く持つ知識人の『おふざけ』のように気軽に自分が刑死する想定を歌に持ち込んだりしないし、本当に刑死する虞なしに『石見相聞歌』群の創造は無理だ」と、いわば梅原猛の立場を代弁してみたのである。ここで使った「欠如モデル」とは、科学技術社会論で科学技術について「科学技術のことはシロウトには分からないから専門家に任せろ」という考え方を表す専門用語（文化人類学起源の）である。この用語を比喩的に文化論に使ったのが上記で、わかりやすく言えば万葉和歌の専門家にとって、万葉和歌の力強さは漢詩の影響を高度に駆使したもので、当時の和歌と漢詩について高度な知識を持つ専門家だけが発言でき、大衆はその能力が欠けているから、大衆の発言は顧慮しないということになる。「高コンテクスト」文化も同様の専門用語でわかりやすく言えばシロウトの入り込めない世界ということになる。

百人一首のカルタにもなって大衆に親しまれる柿本人麻呂を専門家だけの世界に閉じ込めてよいものかとの疑念は湧く。ここで「建国神話模索の動き」を検討する必要が生じる。これを技術者倫理で解析すれば、日本のメソ倫理を「人体実験」のファシズムへの反省からややアメリカ型ミクロ倫理を加えた動きになるのではないか。

法学者は八月革命説を唱える。憲法をはじめとした法律が日本国のすべてを規定し、倫理問題まで制御すると考えるなら「革命」が八月十五日に起こったのかも知れない。しかし、倫理問題は昭和天皇が農耕技術の守護神としての天皇の役割を強調して宮中で自ら田に入り田植えをすることを始めたことに象徴される、「メソ倫理の修正」であって革命ではないのではないか。

梅原猛と猿之助が歌舞伎の門閥制度の打破を唱えてスーパー歌舞伎を設立しようとしたときは、確かに革命に見えた。けれど、それは結局うまくゆかなかった。門閥制度の打破ということがあって、猿之助は香川輝之を子供と認めなかったのかも知れない。けれど、結局孫が生まれ、香川も歌舞伎役者になって、家族関係は落ち着いても門閥制度打破の夢は潰えた。

---

8) 小西甚一、『日本文藝史Ⅰ』,(1985), pp.386-388.

なぜ歌舞伎の門閥制度打破がうまくゆかないかは、技術者倫理で説明できる。まず、技術者倫理のメタ、マクロ、ミクロ、メソの違いをよく例示されるエコカーの購入で確認しよう。メタ倫理はそもそもエコカーを含め車の存在が必要か、科学技術の発達が人間に幸福をもたらすかといった観点の倫理であり、マクロは科学技術社会論そのものとしてエコカーをめぐる社会と科学技術の有り方の検討、制度設計などを重視することであり、ミクロはそうした考えを含めて自分がエコカーを買うか買わないかの判断を重視することであり、メソは制度を重視して制度設計や自己のエコカー購入を判断する上の倫理ということになる。

イギリスを含めた西欧の場合、メタやマクロの議論は知識人に限られている。イギリスの場合は中流階級、それもオックスフォードとケンブリッジを出た人々が議論して決め、制度設計もして、労働者階級はそれに従わざるを得ないことになる。アメリカの場合は、それを打破するために、ミクロの技術者倫理として個人を重視する。制度設計の理解のために選挙で選ばれた議員などの議論の情報公開を求めつつ、自分がエコカーを購入するか否かを判断する。

日本ではメソの技術者倫理は制度、組織と個人の関係が重視されるとしていることをエコカー購入の場合について詳しく検討してみよう。日本人はメタやマクロの議論に興味がない訳ではない。エコカー減税といった制度についての議論には十分関心を持つし、その背景にある哲学についても関心を持たない訳ではない。また自分の人生哲学に照らしてエコカーを買うか否かを判断しようとする。しかし、親戚や会社の同僚との意見交換があれば、それも重視し、エコカー減税で算盤をはじいたことも加味して、総合判断する。

西欧では知識の突き詰めた議論が重視され、その議論を理解しない人々は半ば強制的に服従を強いられる。そうした階級制を打破することが国是であるアメリカも、「知の支配」を否定できない。博士号取得者を基準として、その人たちの議論に支配される。つまりメタ、マクロ、ミクロには支配・被支配の関係がある。これに対しメソにはそれはない。

哲学的議論、制度的議論、人間関係を総合判断するシステムの社会では、議論だけを重視するのではないので、「知の支配」がない。エコカーでいえば、理屈ではエコカーを買うべきだが家族の一部が反対しているから買わないということが堂々とまかり通る。

このメソの倫理が中心にある日本の一次モデルは、歌舞伎と演劇（明治以来の新劇が発展した演劇やミュージカル）の違いで、歌舞伎には伝統的には存在しない演出家について考えれば分かり易い。俳優から大道具、小道具、照明まで、すべてを支配する演出家は絶対的であって、そこには支配・被支配の関係が厳として存在する。歌舞伎にはそれが無い。伝統的に受け継いだ芸として、約束事があって、それをよく知る古株の弟子の知見が人間国宝の俳優より優先されることがある。

こんな歌舞伎の世界で門閥制度の打破が出来るだろうか。まず、スーパー歌舞伎で集められた、歌舞伎の門閥の御曹司ではないという意味でシロウトの人々の芸が、どうしても到達出来

なかった芸を考えたとき、ピアノやバイオリンのように子供ときからやらなければものにならない芸の要素が歌舞伎にあることに気付かされる。それなら音楽子供教室に倣って歌舞伎子供教室をつくれればいいのだろうか。

歌舞伎は制度・組織と個人を重視するメソ倫理の世界である。そもそも門閥制度打破という主張自体、個人を制度・組織から独立したものとして、個人の改変を言うならマイクロ倫理、制度・組織の改編を言うならマクロ倫理になる性質のものである。マイクロ・マクロ倫理は欧米流の「支配の文化」であり、メソ倫理は日本の「尊敬の文化」だと言っても良い。この論理でいけば、門閥制度を打破したら歌舞伎が壊れてしまうことになる。

梅原猛の柿本人麻呂刑死説に「歌俳優」で応えた論議についても、メソ倫理の日本文学に梅原がマクロ・マイクロ倫理の西洋文学の考えを持ち込んだ気味がある。文学の作り手と享受者が同一圈内にいて分かり合える世界は、当然、制度・組織と個人が重視されるメソ倫理の世界でもある。歌舞伎でも見巧者がいて、大向こうからの掛け声のタイミングを知る観客との交流は、その世界ではないか。

梅原猛の柿本人麻呂刑死説は「歌俳優」で応えて小西甚一はやや否定するし、観阿弥の出自を伊賀とする見方を表章は否定する。けれど中西進は柿本人麻呂刑死説を真っ向から否定はしない。また表章の師である能勢朝次は、観阿弥の出自を伊賀とする見方を断定的に否定する訳ではない。表章は観阿弥の伊賀出自説を支える「伊賀観世系譜」には能勢の『能楽源流考』を読まなければあり得ない記述があって、一方これは「贋作」とするにはあまりによく出来ているので「昭和の創作」としたという。

梅原は一方で欧米の人間が動植物を支配する人間中心主義を批判している。ベーコンやデカルトはロゴス（論理）を知ることで自然を奴隷のごとく使う思想で、それで近代文明はつくられ、自然支配の哲学が富と武力で世界を征服した結果、今の人類の危機があるとする。<sup>9)</sup> 日本のメソ倫理文化を西欧のマクロ・マイクロ倫理文化に改変してしまう意図は、少なくとも晩年はないようである。以上を総合すれば、法学者の八月革命説とは異なり、いわゆる文化論の領域の知識人はメソ倫理文化のややマイクロ・マクロ倫理文化寄りの修正をしたいのが一致するところではないか。

その象徴が能勢朝次の『能楽源流考』ではないか。日本のメソ倫理文化に忠実な記述で能楽の源流をたずねてはいる。しかし、一点メソ倫理文化から外れていると思われるのは、何故そこまで能楽が尊重されなければならないのかという点である。能楽は西欧に肩を並べたい明治政府の政策として、西欧のオペラに対応するものの位置を与えようと、岩倉具視が考え付き、アメリカのグラント將軍の来日時に披露して激賞させて国家を代表する藝能に仕立て上げた。

---

9) 梅原猛、『日本の伝統とは何か』,(2010), pp.137-9.

『能楽源流考』は第二次世界大戦後の瓦礫から立ち上がる日本国民の意識の反映があるのではないか。明治維新の五箇条の御誓文を想いながら昭和天皇が終戦の詔勅を読み上げることで戦後が始まり、まるでグラント将軍に観覧させて能を西欧のオペラに匹敵するものに岩倉具視がした精神を受け継ぐように、能勢朝次が大著の『能楽源流考』を書き上げた。その能勢の講義を、表章によれば熱心に受講した観世寿夫が、「井筒」を演じて能の最高傑作にしてしまった。<sup>10)</sup>

要するに日本文化というローカル文化を世界文化にしたい願いがこれらの活動には籠められている。そして、これと米国シェイクスピア研究学位論文の群とが、同じ方向性を持っているとしたら、これは奇矯な考えであろうか。

どうして多くのアメリカ人が、いわば他国であり、独立戦争時には敵でもあったイギリスのナショナリズムの近くにいる「詩聖」を熱心に研究するのだろうか。そこにはビジネスと科学技術の技術に限っては頑張っているものの、精神文化はまだイギリスにはかなわないという意識があるのではないか。または、かなう、かなわないではなく、民衆の力を結集して、気取った英国の中流階級の文化をアメリカの見識が凌ぐものにしたい熱意があるのではないか。

アメリカのシェイクスピア研究論文には、シェイクスピア作品が四百年前のもので、資料も十分でなく、分からないことが多いことを忘れない認識が常にある。シェイクスピア別人説についても、すべてを並列に認識して、どれかの立場を取らねばならぬという義務感はない。それは能勢朝次が多くの資料を駆使して断定的な結論は出さず、常に控え目に意見を言うことに酷似する。

ところで岩倉具視が考え付き、アメリカのグラント将軍の来日時に披露して激賞させて国家を代表する藝能に仕立て上げた1877年は意義深い年であった。その前年に坪内逍遙が開成学校（東京大学の前身）に入学し、翌年にフェノロサが来日した。シェイクスピアを日本に紹介し、日本の能を含めた藝術を世界に紹介した俊英が、活動を始めた時期である。

逍遙はやがてフェノロサの講義を受けて自らの文藝活動の中心にフェノロサ流の美学を据え<sup>11)</sup>、梅若実に弟子入りして謡曲を学んだフェノロサの能の訳はパウンドやイエイツに影響を与えた。<sup>12)</sup>

坪内は『ハムレット』二幕二場のハムレットが人間を讃えて言う "What a piece of work is a man!" を「人間は、ま、何たる造化の妙工ぢゃ！」と訳す。この人間賛美を、梅原猛が晩年になって批判する西欧近代文化による「人間による自然支配の哲学」なのか（②のベーコン説ならそうなる）、日本のメソの技術者倫理を含む、より普遍的なものかの解釈で坪内の訳の評価は変

---

10) 表章、『能楽研究講義録』,(2020), p.308.

11) 小西甚一、『日本文藝史 V』,(1992), p.415.

12) Ibid., p.498.

わる。

戯作から近代文学への過渡期に位置する逍遙と、フェノロサの美術と文学を結びつける現在で言う「藝術」のコンセプトは、1877という年と結び付くことを先述した。1877年にエジソンが蓄音機を発明し、1879年には京都の竹から改良を重ねて長時間の使用に耐える電球を実用化した。フェノロサは、単に鑑賞や文献の訳読にとどまらず、梅若に弟子入りして能を学ぶ技術と実践を尊重する人である。そういう文化環境にあって、シェイクスピアのハムレットの人間賛美を「造化の妙工」と呼ぶ翻訳が誕生した。

アメリカは科学技術の科学と技術を峻別した上で技術に重点を置く国である。エジソンに代表される技術基盤の成功と、貧困救済のチャリティーの物語には事欠かない。エジソン自身がチャリティーを行った話はあまり聞かないが、エジソンに憧れることとチャリティーは結び付くらしく、エジソンの名前を冠したチャリティー活動は散見する。エジソンの日本版である松下幸之助は渡米して昼間も電燈が点いていることに感動し、チャリティーも精を出して行った。ビル・ゲイツのチャリティーは有名である。

エジソン流の技術と起業の結び付きは、成功の結果を外から見ると、傲慢な支配欲に見える。けれど、実態を中から見れば赤貧から身を起すマイノリティー側の視点は常に失われなない。それとミクロの技術者倫理が結び付いている。ここでマキューアンの『贖罪』を想起すると、二つの性的な事件と事故、本当の強姦事件と、強姦に間違われた和姦の突発事故が描かれていて、強姦の犯人はチョコバーで儲けた企業家であり、和姦の突発事故で性的な過ちを犯したのは使用人の息子でケンブリッジに行かせてもらった男性である。

強姦は個人の欲望を抑えられないモラルの欠如であり、懲罰召集は、本来支配する側の資質を持つ者が被支配者の身分に落とされる、マイノリティーへの差別の辛さを味わうという罰を受けることである。その詳細が描かれるのはドイツ軍からの敗退のシーンである。これと、本論文シリーズで度々引用した、日本軍のインパール作戦などでの敗退シーンがある旧日本兵の自伝的小説<sup>13)</sup>との比較はミクロの技術者倫理とメソの技術者倫理の比較になって興味深い。

今敗戦で軍隊がつぶれかかっても、(将校当番のなり手はないが)、将校の名誉は村の顔役程度に尊重して、やさしく秩序が守られている。民主を強調しなければならぬ国ほど非民主的じゃない。<sup>14)</sup>

同じ敗走兵の集団でも、『贖罪』で描かれる軍隊の場合は、将校に見付からないように兵隊

---

13) じっこくおさむ、『ミヤンマー物語』（三省堂, 1995）。

14) Ibid., p.261.

はここそと逃げ回っている。一度軍隊がフランスから海を渡って引き上げるにしても、懲罰召集の男性は、外辺防御のための兵隊を徴発する軍曹をごまかすため足をひきずる演技を強いられる場面がある。

もちろん日本軍の場合は敗走して、そのまま解体されてしまう。一方、『贖罪』に描かれたイギリス軍は、ロンドン空襲などの憂き目にあった後、もちなおしてノルマンディー上陸作戦などで盛り返す。そうは言っても、「将校の名誉は村の顔役程度」になって自然消滅する日本軍の人間関係は、技術者倫理がメソである所以だと感じさせられる。

西欧がマクロ、アメリカがミクロ、日本がメソという技術者倫理になる背景には、西欧の強固な階級制、アメリカの西欧からはみ出し者が建国した意識、そして日本の上下左右を氣遣う人間関係の強さがあるのではないか。

上記の旧日本兵の自伝的小説は、戦争の当初は軍隊らしく階級制が守られていても、実際の戦場では戦場に適応する者が階級を無視して頭角を顕わし、主人公も古参兵として将校何する者ぞの振り舞いをして、物資を横流ししようとした将校に短剣を突きつけてそれを阻止したりもする。平時にある日本の上下左右を氣遣う人間関係の強さは、最終的に敗走時に力を発揮して、敗走して立場を失った将校さえ、下から優しく氣遣われる立場で、権力をなくしてゆく。

戦後、ナチスは人道に対する罪で追われ、指揮命令系統に従って戦争責任の追及を受けた。それは連合国側からの追及もさることながら、ドイツ国民自身が自分たちを戦争に駆り立てた指揮命令系統を強く意識したまま糾弾したからではないか。先般亡くなったドイツ連邦の元大統領ヴァイツェッカーの「過去に目を閉ざす者は、現在に対してもやはり盲目となる」という言葉が改めて想起された。ドイツは過去の指揮命令系統で人道に対する罪を犯した。そのことには目をつぶらず、しっかり見据えた上で、罪は罪とした上で未来に向かって新しい指揮命令系統を構築して進んでゆこうというものであろう。

日本の場合、上記の自伝的小説で窺われるのは、当初は「軍部の暴走」と言われる指揮命令系統が存在し、ある程度日本軍は暴れた。けれど、その後戦争を維持したのは、日本の上下左右を氣遣う人間関係の強さであって、その中に指揮命令系統は「優しく」消滅したことになる。それでは、いくら目を見開いても、ドイツのように自分たちを戦争に駆り立てた指揮命令系統を強く意識することは出来ない。

上記の旧日本兵の自伝的小説の最初の方に、村人への強姦の嫌疑で憲兵から拷問される二人の兵隊の話が出てくる。その結果、強姦の真犯人は被差別民であったことが判明した。こちらは事実に基づく小説で、『贖罪』は完全なフィクションながら、性的な事故や事件を起こす人物の設定は、起業家であったり、メイドの息子であったりする。いわゆるイギリスの中流階級から見た「アメリカ」と結び付く人々ではないか。

これを念頭に米国シェイクスピア研究学位論文の中の強姦を取り上げた二つの論考を紹介し

たい。一つは『ルークリース』『タイタス・アンドロニカス』だけでなく、シェイクスピアの詩的表現の根幹に「強姦」（レイプ）があって、「略奪愛」（ラヴィッシュメント）と女性の同意を無視し女性を家父長の財産とみなす法体系では同一視され、『オセロ』や『マクベス』（ダンカン王殺しが、まるでタルキンがルークリースを強姦したように描かれる）にまでそうした考察対象が広がるとする論考<sup>15)</sup>である。

今一つは、レイプ体験者が多いクラスでシェイクスピアを教える体験をもとに、女性が男性の所有物であってレイプは所有物毀損とみなされたり、妊娠すれば女性がレイプに喜びを感じたゆえとみなされ断罪されたりするシェイクスピア時代の歴史を踏まえ、ルークリースやラヴィニアというレイプされる登場人物の、とくに沈黙の表現力を分析したものである。この論考<sup>16)</sup>は、タイタスがラヴィニアを殺すのを現実には直面したくないからゆえといった、汚れた娘を殺して浄化する前近代的な感覚を理解できない面が示すように、二十世紀以降の現代的な女性感覚を大切にす。『ヴェロナの二紳士』も援用し、レイプを受容しても決してレイプした男性を許すことがない女性感覚に無理解なシェイクスピアの限界も示す。

この二つと、先述した、レイプされた女性の嘆きが共和国設立につながるという奇抜な発想の論考<sup>17)</sup>を併せると、ここまでレイプにこだわるのはアメリカならではの論考だと指摘したくなる。レイプ自体はイギリスでも多く発生しているであろう。しかし、シェイクスピア研究で博士論文を書く人物に、そこまでの「レイプ環境」があることは稀である。階級社会で選り分けられ、シェイクスピアでGCSEのAレベルを取って、ラッセルグループに入るような良い大学に進学したものが学位を取る。もちろん、上記の論考のレイプ体験者が多いクラスでシェイクスピアを教える体験をするイギリス人の学卒者はいても、それを種に学位論文を書いて、それがイギリスのどこかの大学で受け入れられるかどうかは疑問である。

イギリスの見方でいえば、強姦は比較的下の階級のものであり、アメリカは西欧の階級社会からのはみ出し者で構成される国であって、西欧がまともに問題にしない強姦の問題を正面から取り上げる社会だという意識があり、同様の意識はアメリカ自身にもあるのではないか。

こうした強姦問題は、強姦される側にしても強姦する側にしても極めてミクロな個人的な問題になる。レイプされた女性の嘆きが共和国設立につながるるとすれば、国家樹立というマクロな問題にも見えるけれど、それさえもミクロな倫理問題である。武器をとって王の圧政に反抗する権利を認めることは、アメリカの銃社会にもつながる個人の倫理の問題であって、独立宣

---

15) Faherty, T. J., *Shakespeare's poetics of ravishment*, (1995). MF||189||60

16) Myrick, April Marie, *"Shall I speak for thee?": Lucrece, Lavinia, and the language of rape*, (2003). CR||291||1

17) Murray, Vicki Elizabeth Joan, *Shakespeare's "Rape of Lucrece": A new myth of the founding of the Roman Republic*, (2003). CR||291||1



言自体ミクロ倫理の世界ではないか。

一方日本がメソ倫理の世界であることは、聖徳太子の『十七条憲法』に明らかといえば、奇矯に聞こえるであろうか。先述した梅原猛が西欧的ロゴスは自然支配の論理だと指摘した書物に「道徳としての『十七条憲法』」という項目<sup>18)</sup>がある。その主眼はこの憲法は官僚を戒めたものだということである。官僚の道徳がそのまま憲法になるところに日本の倫理がメソ倫理であることが端的に現れているのではないか。官僚が争わず、官僚の合意文書としての詔に官僚が従えば国は収まるということではないだろうか。

官僚とはそもそも為政者と民をつないで、政治がスムーズに行くことを補佐する役目のはずである。その官僚の心得がそのまま国を治める憲法になるところに、日本はメソ倫理の国である証ではないか。官僚との戦いを掲げ、選挙公約、マニフェスト、国家理念といった用語を駆使して（これらはすべてマクロ・ミクロの倫理にも基づく）民主党が政権を取り、結局失敗したのは、日本がメソ倫理の国であることを忘れ、マクロ・ミクロの倫理を押し付けようとしたからではないか。

以上の考察を経て、能勢朝次の講義を表章とともに聴いた観世寿夫が、小西甚一の期待を背負って西欧の演劇と日本の伝統演劇を結び付けようとして早世したことを考える。イエイツの「鷹の泉」が現代能に取り入れられていることを小西は指摘する。<sup>19)</sup>それに加え、観世寿夫の「井筒」の演出自体に西欧が取り入れられているのではないかということを指摘したい。それは「井筒」の井戸側を擬した作り物にさしたススキの穂が麦に見えることである。ススキといえば「何ごとも招き果てたる薄哉」という芭蕉の句があるように、穂先が垂れていることが特徴である。それが寿夫の演出では穂先がまっすぐに上に伸びて麦の穂のようだ。井戸の水という設定とともに、ルルドの泉のような聖母マリアの存在を連想するのは、私だけであろうか。

ススキが垂れていて月の光がある情景では、あまりに日本的な秋の風情になり過ぎる。ススキをまっすぐにして、聖母マリアの表彰である麦の穂からルルドの泉を連想させ、場面に西欧的な連想の広がりを持たせた。とはいえ、カトリックの視点でのシェイクスピア論、とくにスペインのカルドロンとの対比は多くあってシェイクスピアとカトリックを結び付ける論考は多くあっても（シェイクスピア時代の英国教会はカトリックからの分離・独立は十分ではなかった。王政復古期以後の高教会の演劇性とシェイクスピアの結び付きに異論は少ないので、これらは成功することが多い）、能とキリスト教を結び付ける論考や演出の試みはなかなか成功しないのは、これまで論じてきたように、キリスト教がミクロ・マクロ倫理の典型なのに対し、能を含め日本の伝統演劇がメソ倫理だからではなからうか。

18) 梅原猛,『日本の伝統とは何か』, (2010), pp.128-130.

19) 小西甚一,『日本文藝史 V』, (1992), p.498.

「井筒」の井戸の水面を覗きこみ、男装した女性（に扮した男性）が自分の鏡映像を見ることの意味は深い。「井筒」は単に幼い日の恋を偲ぶものにとどまらない。一度自分から他の女性に心変わりした男の姿がそこに映っている。その男との始まりは強姦に近いものだったかも知れず、他の女性との始まりも強姦だったかも知れない。これは「井筒」を可能な限りおどろおどろしく解釈した場合であるものの、それがこの作品の奥行を深くしていることを指摘したい理由がある。というのは、泉と女性の姿とは、強姦や強姦の誤解とともに『贖罪』の重要なイメージだからである。

後に悲恋の恋人同士になる二人が泉の傍で花瓶の受け渡しで争い、花瓶を泉に落としたのを拾うために女性はスカートを脱いで泉に入り、出てきたとき、濡れた局部を際立たせた姿になる。それを妹が窓から目撃する。一方、同じくその姿に刺激された男性は、「局部」というキリスト教文化圏では禁句である言葉を含む女性宛の手紙を書き、もっと穏やかな文面の手紙に書きなおすものの、あやまって前者を、その女性の窓から見ていた妹に託してしまう。それを妹は開封して男性を強姦魔と誤解する。また図書館でふたりっきりになったとき、男性と「局部」を泉から出るときに半ば晒した女性は、和姦の行為をしてしまう。その終りごろ妹が図書館に来て、行為を強姦と誤解する。

ここで女性は三度犯されたとも解釈できる。泉から出たときの「局部」をさらして男性の視線に犯され、図書館で和姦に及ぶという二回の男性に犯される体験に加え、その前に「局部」という言葉のある手紙を男性から贈られるのも、言葉で男性に犯されたようなものではないか。そして和姦の現場が図書館であったということは、以下のシェイクスピア論を参照すると、深い含蓄が感じられる。

というのは、女性を本とみなし、そこに書き込む行為を比喩につかうシェイクスピアのテキストを中心に、当時の女性の権利関係も考察し、読み書きの教育における性差別にも言及する論考<sup>20)</sup>があるからである。このことと日本の伝統演劇を結び付けるなら、『祇園一力』のように遊女でも鏡に映して密書が読めるのだから、読み書きは日本の場合、女性差別とかかわりにくい。平安女流文学にほとんど漢字がなく、物語が軽蔑され、公文書は漢文で、漢詩が尊重されていたことを踏まえて、漢字に限れば、女性差別があったと多少言える。漢文が武士文化の核なら、密書を読んだおかるが成敗されるのも武士・漢文の論理である。しかし『祇園一力』ではおかるの兄が義士になり、おかるは命を救われる。歌舞伎はむしろ男女対等の側面が強い。

西欧では読み書きは男性が独占し、シェイクスピア時代でも、いわゆる貴族でも、女性は読めても書けない人が多く、自分の名前さえ書けずに記号で署名したともいわれる。日本では、

---

20) Sanders, Eve Rachele, *Inscribing Selves: Gender and Literacy in the English Public Theater*, (1995). MF||189||62

男性は漢字、女性はひらがなという一応「性差別」があったともいえる。しかし、『土佐日記』のように男性が女性になって書物を書き、ひらがなを使用することを見れば、「性差別」ではなく公的と私的の「差別」、つまり官尊民卑の始まりが漢字とかなの区別ともいえる。

日本における文字と差別の関係について、さらに突っ込んで考えれば、江戸時代まで漢文とひらがなの多い和文との併用で来て、明治の言文一致運動、戦後の総ルビ追放運動を経て、現在の漢字かな交じり文に至った日本の文字政策は、「知の特権階級」をできるだけ作らない政策であって、これこそが西欧諸列強の植民地にならず、先進国の仲間入りを果たした理由とも言ってよいのではないか。

もし日本にひらがながなかったら、現在の中国のように極端な格差社会に苦しむことになったであろう。その前に欧米による植民地化は避けられない。単一の文字体系は、中国の科擧のような序列化がやりやすく、階級制が必然的に生じる。外国文化の取り入れがスムーズでない、旧態依然とした閉塞状態になり、また階級制があることは欧米諸列強の植民地になりやすい。英国は自国の階級制を巧みに利用して、アジアの国を植民地化して統御した。技術者倫理でいえば、マクロ倫理の国同士は征服しやすいのだ。

もし日本が漢字を排してひらがなのみを採用していたらハンダ一本にした韓国のように、財閥が独占する国になるのではないか。表音文字だけの国は、英語の受け入れがやり易い。自国語も英語も序列化がやりやすく、英語を取り入れた受験戦争は中国の科擧以上に加熱して、国民を序列化し、財閥のような「知の特権階級」(ビジネスのノウハウといった「知」を含め)の発生を許す。

漢字仮名混じり文の採用の最大の利点は外国文化のスムーズ過ぎるほどの受け入れである。日本で翻訳が発達しているのは漢字仮名混じり文のせいだと思う。どんなに英語に習熟しても、それよりは漢字仮名混じり文の日本語が読みやすい。それは自国語だから当然と思われるかも知れないが、そうではないと思う。たとえば、日本語をひらがなばかりの分かち書きしたものや、ローマ字のものであれば、英語に習熟した人間にとっては、英語の方がはるかに読みやすい。四十年以上シェイクスピア研究に従事して、『ソネット集』などは全篇をほとんど暗記しているのに、それでも漢字仮名混じりで一行ほどの要約文をデータベース化していると、何番のソネットがどういう内容だったかを思い出すのに一瞬で済むので、原文より「翻訳」が読みやすいと感じる。

自国語だからではなく漢字仮名混じり文だから翻訳が読みやすい傍証として、例えばフランス語の小説の英訳本をロンドンの書店であまり見かけなかったことがある。英文学研究者なので、フランス語も多少できるものの、はるかに英語に習熟している。それでもフランス文学を英訳で読もうとは思わない。フランス語の原文で読んだ方がはるかに味わいも深いし、それを英語に直してよんでも、味わいが少し悪くて手間は同じくらいかかるので、何のメリットもな

いと感じる。イギリス人で小説を読むほどの知的な素養がある人なら、フランス語は読めるはずだ。その場合、英訳で読むメリットはないから、フランス語の英訳の需要はきわめて小さいのであろう。

漢字仮名混じり文の最大のメリットとデメリットが考察出来るのは映画の字幕スーパーではないか。まずメリットとして、日本人は字幕スーパーをちらりと見て理解し、映画の外国語の会話を音声としてじっくり聴く余裕がある。この字幕スーパーをちらりと見る行為は、果たして通常の言語の解読を素早くやっているだけなのか、何か道路標識でも見て理解することのような言語解読とは異なる行為をしているのか、脳の働きを調べてほしいと思うくらい素早い。その結果、翻訳大国と並んで、字幕スーパー付外国映画大国になっている。外国文化受け入れのスムーズさを加速している。

デメリットは、いくら TOEIC の点数を評価して、日本のあらゆる学習の場で実用英語を奨励しても、読み書きはともかく、聞く話す能力が日本人には身に着かないことである。字幕スーパーだけでなく、優秀な英和辞典も同じ効果をもたらしている。

例えば“interview”という英語に、日本以外の国々では優秀な英語自国語辞典を持たないので、詳しい意味は英英辞典で調べるよりほかにない。そうすると協議や議論のために誰かと会うことといった英語が意味として掲げられている。英和辞典を引くと「会見」「面接」「(医者)の診断」「会談」「面談」「取材訪問」「(警察)の尋問」「訪問(会見)記事」などと主に漢語の二文字熟語が並ぶ。“interview”という英語にこれだけの意味があることを日本以外の人々が知るまでには、多くの英語体験が必要になる。日本人は英和辞典を一瞬見るだけで理解はするものの、聞く話す体験をしなくても理解できてしまうので、映画の字幕スーパーがあれば利用してしまうのと同じで、英和辞典なしに日本語を介さず英語で考え聞く話す英語学習の機会を、是非とも思わずに、みすみす逸してしまうことが多いのではないか。

日本人は自国内に「知の特権階級」をできるだけ作らず（つまり支配・被支配のマクロ・ミクロ倫理を排し）、漢字仮名混じり文（ときに漢語をカタカナ言葉に置き換えて）外国の「知」を取り入れてきた。メソ倫理の世界である。

米国は市民革命の継続を理念として、下剋上の状態を継続する。マクロ・ミクロ倫理のミクロ倫理に重きを置いた世界になる。そして移民を受け入れ、外国人差別を排する姿勢を崩さないことで外国文化も受け入れてきた。TOEIC には「英語帝国主義」の批判もある。しかし、その理念はおそらく、起業と企業的成功（それも多国籍企業としての）、儲けた金の社会への還元としてのチャリティーのサイクルで世界制覇する中で、外国人を企業内で差別しない方策なのではないか。日本と同じく「知の特権階級」を作らない工夫として、博士号取得者の平等を掲げる。米国シェイクスピア研究学位論文は、そうした制度の功罪を伝えてくれる。シェイクスピア別人説にしても、候補を併記するアメリカとは違って、①と③を重視する英国は、

四百年前のことを、まるで見てきたように語る気味がある。それは、シェイクスピアと同じ土地に住む者にしか分からない理解力ゆえとも解釈できるものの、建国神話に重なるバードラトリーの変形として、フィクションの可能性も捨てきれない。

こうした考察を可能にするのは "What a piece of work is a man!" を「人間は、ま、何たる造化の妙工ちゃ！」と訳す坪内逍遙に出会い、その考え方の背景にあるフェノロサに出会い、梅若実に弟子入りして謡曲を学んだフェノロサの能の訳はパウンドやイエイツに影響を与えた事実を知り、小西甚一（ドナルド・キーンと懇意になり、アメリカ留学をした）によって、そうした文化交流の情報を得たことである。アメリカのシェイクスピア研究論文と、能勢朝次の『能楽源流考』に共通する、多くの資料を駆使して断定的な結論を出さない科学性がそのさらに奥にある。

とはいえ、能勢朝次がいかに主観を抑制し「科学性」（当時は実証性といわれていた）を強調しようとしても、そもそも能楽がそんなに大切なのかと問えば、岩倉具視がグラント将軍に「日本のオペラ」として見せた鹿鳴館的な意図を否定できない。廃れかけた能楽を西欧と伍したい意図で国家が押し出したのだ。

師である能勢朝次には実証性でかなわないと見た小西甚一が、ドナルド・キーンと親交を結び、アメリカ留学に向かうのは、そもそも能勢朝次に内在した研究要素の発展ではないか。グラント将軍に能楽を見せた岩倉具視と、岩倉使節団を想えば、自然な流れであった。

文学研究におけるナショナリズムを考えると、自国民の「好み」を考えるより、「実証性」がもっとも強力な武器になる。文学研究で「実証的」であるには、その国で育ち、その国の資料を十分に使えるという意味で自国を愛するというナショナリズムが、最も強力な推進力になる。「好み」の方は当てにならない。年末になれば「忠臣蔵」が必ず当たるといわれた日本人の「好み」は、時代とともに変化している。敵討ちが日本人のモラルの中心にはなくなっているからだ。

英国人のシェイクスピア好みは、GCSEでシェイクスピアを取ってAレベルでなければオックスフォード大学やケンブリッジ大学に入学できず、両大学を中心にした階級的な支配構造にゆるぎがないので、当面変わりそうにない。シェイクスピア研究での「実証性」をいうなら、その国で育ち、その国の資料を十分に使えるという意味で自国を愛するというナショナリズムの結実は、ウェストエンドの上演記録そのものであろう。そうした資料から、「ナショナル・ポエット」の概念を追及するマイケル・ドブソンも、その意味でのナショナリストだ。しかし、そうした「実証性」の古典的業績は、シェーンボーンというアメリカ人によってなされた。

資料を駆使するだけなら外国人にも出来る。アメリカの文学研究者の特徴は、「普遍的な価値」の追及だ。シェーンボーンもシェイクスピアの伝記から事実と異なる伝説を排した。能勢朝次が能楽研究から事実と異なる伝説を排そうとしたのに似ている。それが「実証性」ということだ。違うのは「普遍性」への志向である。能勢朝次が日本に生まれ育ち、能楽の重要性を岩倉

具視がグラント將軍に体感させたことが能楽の重要性の起源にせよ、岩倉具視の立場に立つことであって、グラント將軍の立場に立つことではない点である。世界に伍することは、ある程度「普遍性」への志向はあるにせよ、それだけではない。ある程度の「普遍性」で岩倉とグラントは合意しても、岩倉には「普遍性」をはみだした日本らしさへの「好み」を否定しない面がある。そこであやうく「日本の」ナショナリズムの立場になり得ている。どちらかといえば能勢もその立場であろう。マイケル・ドブソンは伝説の歴史の変遷の流れを追及して伝説を相対化した。それでも、それは英国の「ナショナル・ポエット」の概念の追及であって、その点で英国人である立場はゆるがない。アメリカ人であるシェーンボーンの場合、「伝説に根拠がないこと」に肉薄してマイケル・ドブソンの研究の基礎になったにしても、英国の立場というには、あまりに英国人の常識に対して冷たい。「シェイクスピアの普遍性」を志向したかどうかは定かでないものの「シェイクスピア研究の普遍性」を志向したのではないか。

ドナルド・キーンは日本文学研究で、「日本文学の普遍的な価値」を追及した。どんなに日本を愛し、日本の資料を駆使し、伊勢神宮の遷宮に立ち会ったとしても、「日本文化の普遍的な価値」に興味があるのであって、「日本文化の特徴だが普遍的ではない」ことを排することはゆるがない。それが表れているのは一連の明治天皇に関する著作で、そこで浮き彫りになるのは欧米で評価の高い大統領に比べても遜色ない君主像（というより明治維新で生まれた革命政権の「大統領像」に近い「君主像」）だ。

一般に「普遍的価値しか考えない」のは根無し草のコスモポリタニズムで弱いといわれる。主義主張だけならアメリカニズムは根無し草で弱い。けれど、それと世界一の軍事力が結び付いている。その軍事力の強さは科学技術の発展によるもので、科学技術を文系思想として捉えたらコスモポリタニズムの根無し草で最も弱いものになる。それを強い実力で後押しする。科学技術という要素の導入は「文学研究のそもそもの要素ではないもの」の導入に見える。しかし一頃のフランス文学の隆盛から英米文学の隆盛への変遷と、科学技術の発達や国の軍事力の変遷は、無関係ではない。

「実証性」と「普遍的価値」をめぐるこうした考察において、『能楽源流考』や英国ウエストエンドの上演記録とともに「米国シェイクスピア研究学位論文」は有用である。それが意外なことに日本文学研究に酷似している。イギリスの英文学研究とアメリカの英文学研究を比べるとき、日本の日本文学研究は、同じ旧世界だからイギリスに近いと思われがちのところ、むしろアメリカに近い。

例えば小西甚一に多大な影響を与え、連歌の師でもあった山田孝雄（よしお）は「最後の国学者」と言われる。本居宣長以来の国学の伝統の最後の人だとすれば、そこで「国学の伝統」は途絶えたことになる。では、それ以後の日本文学研究者がどう違うのか。ひとつは能勢朝次について「岩倉具視がグラント將軍に体感させたことが能楽の重要性の起源」と述べたように、

たとえグラント将軍の立場ではなく岩倉具視の立場に立つという微妙なスタンスの分析はあるにしても、西欧基準ということではないか。創作面で日本の近代文学は西欧を意識しないでは生まれないのだから、研究面で西欧を意識しないではいられない。その結果、小西甚一のように科学技術を真剣に見つめる研究者は少ないにせよ、何等かの「普遍性」にこだわらないではいられない。『源氏物語』に価値を認めるのは、本居宣長のせいではなく、西欧で心理小説としての評価が高いからというのが有力で、国内的な価値ではなく西欧的な「普遍的価値」を志向する。

これを念頭にイギリスの英文学研究を考えると、サミュエル・ジョンソンは1709年の生まれで本居宣長の1730年より21年も早い。それにも関わらず、本居宣長が「国学者」で現代の日本文学研究とは一線を画すのに対し、サミュエル・ジョンソンは英文学研究の伝統から外されていない。イギリスの場合、あくまで国内的価値にこだわるイギリスの「国学」のまま、その「国」が「大英帝国」に政治権力で拡大したので「普遍的価値」を持つことになってしまったからだ。イギリスでは「国学」と「国文学」の伝統は区別されないし断絶もない。

一方、アメリカはシェイクスピアという他国で生まれた文学を自国の中心に据えざるを得ないことでも分かるように、西欧基準は外せない。さらにシェイクスピア研究では、はじめに「普遍的な価値」が前提で、それを確認する作業になる。日本文学研究での能楽研究や『源氏物語』研究に酷似している。また「普遍的な価値」が前提なので、科学技術を研究に導入しがちになり、「ベーコン説志向」が底流にある。

典型例を挙げると「多文化主義の立場（アメリカで様々な異文化の吸収を推進する立場）の学習プログラムから、シェイクスピアはヨーロッパ主義、家父長主義（これまでアメリカが異文化の吸収を阻んできた要素）が強いとして排斥される傾向に反論し、多くの言語に訳され世界で上演されるシェイクスピアは普遍的であるとする。問題劇やシェイクスピア＝ベーコン説、シェイクスピア＝ヴィア説などを避け、アメリカでポピュラーなもののみを扱う。その結果『シェイクスピア喜劇には独立して闊達な女性が登場するからフェミニズムの立場にも配慮』といったフェミニズムがまさに噛み付きそうな表現もある」<sup>21)</sup> といった論考がある。

こうしたアメリカのシェイクスピア研究は、イデオロギーに敏感で理屈っぽ過ぎるとの批判がある。その本質的な理由はナショナリズムではなくアメリカニズムだという点ではないか。自国を愛するのに「理屈ぬき」なのがナショナリズムで「理屈なしには愛せない」のがアメリカニズムだ。それは文学研究にも影響する。

西欧基準ということで日本とアメリカの文学研究は共通する。しかし「理屈っぽさ」志向か否かで日米は対立する。ここでドナルド・キーンの「理屈っぽさ」に耳を傾ける必要があるの

---

21) Remillard, Gerard J., *Universality found in William Shakespeare's works*, (2003). CR||291||1

ではないか。明治天皇を明治維新で生まれた革命政権の「大統領像」に近い「君主像」として語ることは、外国人のずれた認識であろうか。「理屈嫌い」の日本人が、「理屈ぬき」の愛国の情に流され、第二次世界大戦にまで突っ走ったのは事実だ。しかし、当の皇室は「理屈ぬき」の愛国の情に流されたであろうか。「現人神」の神話は「八月革命説」の神話に取って代わる。けれど、それより明治維新の方に革命を見て、孝明天皇と明治天皇との間に断絶を儲けるキーンの説の方が説得力があるように思われる。

奈良や京都という関西の地で二千年の歴史を持つ皇室は、有史以来初めて江戸・東京にその座を移した。血統が断絶していないからといって、家格の低い公卿の出である岩倉具視が政治の中心に坐り、その影響を若年より受けて行動する明治天皇と、孝明天皇の間に断絶を設けないのは、むしろそちらの方がおかしいのではないか。

さらに発展させた考えとして、詩歌・管弦の道を専らにして伝統文化に生きる皇室は孝明天皇までで、明治天皇以降は質実剛健の武士に西欧的な政治哲学をプラスした、名目は「君主」でも、実質は世襲の「大統領」（権限は儀礼的なものに留まり、政治哲学を深く極めたドイツの大統領のような存在）という考え方も思い付く。キーンがそこまで考えたかどうかは分からないものの、論理的にはそこまで発展させないではいられないし、この考え方に頷ける面がある。この考え方に説得力があって、日本人が、それと明言せずに、半ば肯定していることは、ドナルド・キーンに文化勲章を与え、現在の日本文学研究の第一人者とするに、そう異論がないことにも窺われる。ただし、この考え方とは違和感を持つ日本人も多いと思う。そこまで「理屈」でナショナリズムに関わることを考えたくないのである。

シェイクスピア研究でこのこと具体例を探せば、例えば「・・・ルークリスの長大な嘆きには、後のシェイクスピア作品の重要なテーマがいくつも顔を出す。それにもかかわらず、より成熟した他の作品に比べて、ルークリスの嘆きが、饒舌・冗漫の感を与えるのは何故だろうか」<sup>22)</sup>との『ルークリス』評と、「レイプされた女性の嘆きが共和国設立につながる」<sup>23)</sup>とする論評の差は「理屈っぽさ」志向か否かでの日米の対立である。

強姦されて自刃するとき、日本女性の心に去来するのはナショナリズムにつながる「日本女性としての誇り」で、それは「理屈ぬき」の情だ。アメリカ女性の場合は「アメリカ女性としての誇り」はアメリカニズムであって、共和国建国の理想であり、それは「理屈ぬき」には語れない。

22) 成田篤彦、『ヴィーナスとアドウニス』『ルークリス凌辱』—二つのオヴィディウス風物語詩、『シェイクスピア全作品論』,(1992), p.437.

23) Murray, Vicki Elizabeth Joan, *Shakespeare's "Rape of Lucrece": A new myth of the founding of the Roman Republic*, (2003). CR||291||1



このルークリースの嘆きが共和国設立につながる論評は、すでに本論文シリーズの「2-3-(a) 女性学傾向の社会論」のところで述べ、小西の「ヘミングウェイの小説は、簡明きわまる文体だけれども、その簡明さは、日常経験を人工的に変形することで成立している。たとえば、女性の話すことばなど、実在の女性が作中場面と同様な状況で言うはずのと、大きい差がある」<sup>24)</sup>との指摘について論じた。ただ、ヘミングウェイの作中の女性の言葉が日本人（もしくはイギリスなど旧世界の人々）にとって不自然に感じるとしても、女性学ないしフェミニズムの主張があるからだとしたことは、さらに拡大発展が可能である。つまりナショナリズムやアメリカニズムの問題に拡大される。強姦されて自刃する女性の嘆きには旧世界ならナショナリズム、新世界（つまりアメリカ）ならアメリカニズムが含まれているからだ。

この「理屈っぽさ」志向否定は小西甚一が全著作を通じて表明するプロレタリア文学への嫌悪にもつながる。文学を文学と呼ばず文藝と呼ぶ姿勢に「情」を中心に据えて「理屈の過多」を排除する。そこには「最後の国学者」を師と仰ぐ姿勢にも通じるものがある。またイギリスも英文学研究は結局のところ「イギリスの国学」である以上、ナショナリズムとの関係は切っても切れない。

ナショナリズムは「理屈抜き」の自国愛なので「情」を中心に据える。かつてシェイクスピアの故郷ストラットフォード・アポン・エイボンのホームページにはベーコン説を否定してベーコンのような「理屈の人」はシェイクスピアのような「情」の人とは違う趣旨がのべられている。今はそこまでナイーブなストラットフォードイアン説は影を潜めた。しかし英文学研究が「イギリスの国学」であることに変わりはなく、ナショナリズムを完全に排除した英文学研究はあり得ない。

これに対し、アメリカにはナショナリズムはなく、代わりにアメリカニズムがあって、それは文学研究と切り離せない。本論文シリーズの「2-1- (d) 西欧文化のマイノリティー迫害告発（多文化主義への底流）」で述べたように、スタンフォード大学で西欧中心の文学史が必修科目として1980年に開設され、これに過激に反発する動きとして全米に多文化主義の流れが広がっていった。<sup>25)</sup>これを拒否する動きが白人中心の「高度な文学」の価値を認める人々から出て、そこからアメリカの分裂に発展しかねないとの予想<sup>26)</sup>につながる。

こうした「西欧かマイナーな国か」の騒動から35年を経て、その間2010年に第二の経済大国に発展した中国を、「非西欧」「非マイノリティー」の文化として取り入れるのもまた米国シェイクスピア研究博士論文の特徴でもある。

24) 小西甚一、『日本文藝史Ⅴ』,(1992), p.643.

25) 古矢旬、『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』,(2002), p.183.(注30)p.218.

26) Ibid., p.311.

中国でのシェイクスピアを論じた例を挙げる。文化的唯物論とは市場経済を念頭においた文芸批評とする捉え方ではなく、中国ではマルキシズムとの生な葛藤があることを示す論考だ。中国を含め共産圏ではゲーテからツルゲーネフのハムレットとドンキホーテを対照させる「Ivan Turgenev, *Hamlet and Don Quixote*, (1860)」の伝統がある。革命を念頭においたインテリの逡巡で、シェイクスピア祭や、シェイクスピア劇の上演すら、当局の取り締まりの対象になった時代から、文化大革命期には毛沢東思想との結びつきまでである。ハムレットは人民解放という意味の「ヒューマニズム」体现者で、ドンキホーテと重なりながら、当局に迫害されながら主張するインテリの象徴イメージになる。フェミニズムは中国に根付かず、シェイクスピア劇の登場人物は、ポーシャなど、解放された女性として憧れの対象になる。イアゴなど悪の系譜は社会悪と捉えられる。九十年代以降、市場経済が浸透し、シェイクスピア現象も哲学を失って俗化したと論考は指摘する。これは、必ずしも日本のようにイデオロギーを超えた文学として市場経済を念頭におくだけになったともいえない。中国服のオペラなど、すでに中国のシェイクスピアは定着し、それと、バレエのステップをとり入れた、さらなる西欧化が問題になる。翻訳の問題として、ハムレットの独白を「死後も人は存在するか非存在になるか」「戦うか戦わないかそれが問題だ」とする、哲学、イデオロギーの背景なしに翻訳はありえない事情も説明する。<sup>27)</sup>

2015年10月のリアルな政治状況として、国賓待遇で中国の国家主席習近平が米国を訪れ、航空機を「爆買い」し、サイバーテロについて米大統領オバマと話し合う。同時にアメリカとキューバの国交回復に力があつたとするローマ法王フランシスコが米国を訪問し、正副アメリカ大統領が家族とともに出迎える。ナショナリズム、アメリカニズム、コスモポリタニズムの政治イデオロギーと、経済の論理と、宗教が入り混じって複雑な様相になっている。これからは国家を外から見た「レッテル貼り」ではなく、国家の内側に踏み込んだ情勢分析が重視される。

シェイクスピア研究を考えると、イギリスの国家の内側に入り込んだ論考は、これまでアメリカのものは的外れのものが多かった。リアルな政治情勢で実態とはずれた「レッテル貼り」が横行していて、君主制を知らないアメリカ人がイギリスやシェイクスピアについて「レッテル貼り」をしても意味をなさないことが多いからである。

スタンフォード大学に発する多文化主義を巡る騒動を記載した古矢旬の本の『アメリカニズム「普遍国家」のナショナリズム』という書名にあるように、自国を愛する「愛国心」の根幹にアメリカニズムという、いわば「レッテル貼り」がある以上（アメリカニズムとは自国に「民主主義国家」の「レッテル貼り」をすること）、「民主主義国家」の「レッテル貼り」ができない国とは敵対し、戦争も辞さないことになる。そのことと表裏一体で情報戦もアメリカは得意

---

27) Yang, Lingui, *Materialist Shakespeare and modern China*, (2003). CR||291||1

とし、ウサーマ・ビン・ラーディンの殺害など実態に即した情報なしにはなし得ないこともしている。「レッテル貼り」という、いわば半ば実態を無視することと、情報戦による殺害という実態の精緻な情報収集なしになし得ないことを、表裏一体としてアメリカは行う。そのアメリカ的手法が最大限に活かされたのがドナルド・キーンの明治天皇論ではないか。

詩歌・管弦の道を専らにして伝統文化に生きる皇室は孝明天皇までで、明治天皇以降は質実剛健の武士に西欧的な政治哲学をプラスした、名目は「君主」でも、実質は世襲の「大統領」（権限は儀礼的なものに留まり、政治哲学を深く極めたドイツの大統領のような存在）という考え方（そこまでキーンは明言しないものの、論理的にそうなる。そこまで考えないと、なぜ明治天皇がヴィクトリア女王を凌ぐ「君主」なのか説明がつかない）は、発想としては明治以後の日本という国家にアメリカ的な「民主主義国家」の「レッテル貼り」をすることであった。その「レッテル貼り」には、日本人が思いつかない真実の指摘と、「レッテル貼り」ゆえのほころびがある。

本論文シリーズの「2-3-(c) 政治学（法学）傾向の社会論」で、北白川宮について、宮が自分を天皇視したこと（「東武天皇」即位説）をドナルド・キーンが「子供っばい」としたことについて、「北国の天皇視が事実としても、それは子供っばい話ではなく、現在に至るまで日本人にとって不自然なことではない」と述べた。

幕末から明治にかけて宮の動向をめぐる分析は、ウサーマ・ビン・ラーディンの殺害など実態に即した情報なしにはなし得ないことをするアメリカ的分析手法の威力を発揮している。しかし、宮が自分を天皇視したことを「子供っばい」とするのは、「血縁の魔力」を理解しないアメリカ人の限界だとも、「レッテル貼り」ゆえのほころびだとも言える。天皇とのある程度近い「血縁」さえあれば、政治情勢がどうであれ、自分を天皇視することは不自然でない。宮が朝敵の盟主としての行動があったにも関わらず、その末に靖国神社に皇室の座を設けてまで祀ることをドナルド・キーンは理解するであろうか。

キーンの明治天皇論を発展させ、現在の政治哲学を深く極めたドイツの大統領のような存在視することを思い付くのは、「血縁の魔力」にとらわれ過ぎる日本人的発想の欠陥を補うものではある。実際、日本人は誰も皇室論としては指摘しないものの、現在の皇室関係者が、どうみても伝統的な公卿の教育と並んでイギリスの大学への留学を重視しているように見え、密かに「政治哲学を深く極めたドイツの大統領のような存在」を意識しているのではないかと思われる。

それもそのはずで、日本のナショナリズムが「情」を中心に据えたにせよ、その表現は和歌であり、漢字仮名混じり文の仮名の領域に集中している。漢字部分は現代の欧米語を記述するカタカナ語に変わっても、ひらがなで表現できる「素朴な情」を古来大切にしている。とはいえ、ひらがなで表現できる「素朴な情」だけでこれだけの国家は成立し得ない。「情」で

足りない「理屈」を補うため、スタンフォード大学の多文化主義の騒動で対立した白人中心の「高度な文学」とマイナーな国の文学も含め、また歴史的には漢籍を専らにした時代もあり、常に外国の文化を参照せずにはいられない民族であることを迫られた。

アメリカニズムとはアメリカが理念国家である証だ。「理屈」で成立する国家ということになる。これとは対照的に日本は「情」で成立する国家であり、ひらがなで表現できる「素朴な情」を古代以来大切にしているし、和歌でいう「ますらおぶり」「たおやめぶり」が一貫して民族の支えである。それにしても、「ますらおぶり」つまり万葉和歌は日本人が思うほど国際的評価は受けない。戦時の一時期突発的に現れるナショナリズム高揚の一步手前でもある。「情」によって成立する国家日本は確かだけれど、それは表向きのことであり、裏では常に外国の文化を参照せずにはいられない民族で、その意味でアメリカが成立する以前からの多文化主義の国家ともいえる。

いくら日本文学を愛し日本に帰化しても、理念国家アメリカの感覚が抜けないドナルド・キーンは、明治天皇論で明治維新時にアメリカ合衆国憲法などを参照してつくられた「政体書」を問題にし強調する。「五箇条の御誓文」もそこから出たもので、昭和天皇の「終戦の詔勅」も「人間宣言」もそこから出ている。ジェファーソンの「独立宣言」の「王の圧政に対抗して人民が武器を取って戦う権利」に対応して「合衆国憲法」の修正が行われた（修正第二条の追加。結果としてアメリカの銃規制が困難になった）ように、日本国憲法の平和主義を「終戦の詔勅」の平和主義への対応（結果として第九条など憲法の平和主義部分を変更することは困難になった）と考えれば、日本は立派に「理念国家」である。

そう考えれば、日本が常に外国文化を参照してきた歴史的な流れの中でも、アメリカを参照することに重点を置き、その実用重視、資格取得によるチャンスの平等などを取り入れるのは、歴史の必然と言える。その筋道を明らかにするのに小西甚一の著作は有用であり、その盟友であるドナルド・キーンの考え方は参考になる。

アメリカ本国では昨今そうした「理念国家」ゆえに「理屈」であらゆることが成立することへの批判がおこり、主義主張を「レッテル貼り」と非難する<sup>28)</sup>。また心理学への関心が高まる<sup>29)</sup>。さらに人の性質を心理学的なタイプに分けることも「レッテル貼り」として反省が迫ら

---

28) TED (Technology Entertainment Design) Conference (TEDが毎年主催して2006年からネットで公開している大規模な世界的講演会)より「他者を昼食に」([http://www.ted.com/talks/lang/jpn/elizabeth\\_lesser\\_take\\_the\\_other\\_to\\_lunch.html](http://www.ted.com/talks/lang/jpn/elizabeth_lesser_take_the_other_to_lunch.html))

29) TED Conferenceより「社会的動物」([http://www.ted.com/talks/lang/jpn/david\\_brooks\\_the\\_social\\_animal.html](http://www.ted.com/talks/lang/jpn/david_brooks_the_social_animal.html))

れている<sup>30)</sup>。

アメリカがリアルな政治情勢で「レッテル貼り」と並行してウサーマ・ビン・ラーディンの殺害など実態に即した情報収集を重視し始めた昨今、シェイクスピア研究もイギリスの研究、アメリカの研究といった枠組みを越えて、当時の宮廷の駆け引きに踏み込んでゆく。こうした情勢を反映して注目すべきシェイクスピア論の実例を10本ばかり挙げたい。つまりイギリス伝統のシェイクスピア研究である「イギリスの国学」に沿ったものでもなく、アメリカ伝統の様々な主義主張の「レッテル貼り」でもなく、実態に即した情報収集を重視してマイナーな文化に配慮したものである。

(1) 「ウイリアム・セシルなどエリザベス朝のカウンセラーが君主制を変質させ、やがてイギリス革命を招いたという批判はあたらす、実態は無力であったことを考察」したもの<sup>31)</sup>

(2) 「フランス革命の経過から、イングランド、アイルランド、スコットランドといった国ではなく、英国全体のアイデンティティーが成長することを、フランスの資料をもとに考察」したもの<sup>32)</sup>

(3) 「『冬物語』の主筋と無関係なオートリカスの登場シーンは、レオンティーズの投げかけた問題(妃の不倫の嫌疑)が解決することと関係することを分析」するもの<sup>33)</sup>

(4) 「スコットランドのジェームズ六世がイングランドのジェームズ一世になったとき、彼は圧政的とも妥協的とも言われる。どちらでもなく、シェイクスピアのマクベス、リア王、シンペリンなどと同じく圧政、妥協の両面を持つ君主として新秩序に君臨した」とするもの<sup>34)</sup>

(5) 「シェイクスピア劇に登場する、父に反抗する娘群は、資質が反抗対象の父親に酷似することを指摘。シェイクスピア自身の娘の独立や、当時の女性の独立性との関連を指摘する」もの<sup>35)</sup>

(6) 「宗教と民族の違いで他者との差異によってアイデンティティーがゆらぐことを、地中

---

30) TED Conference より「サイコパステストへの奇妙な答え」([http://www.ted.com/talks/lang/ja/jon\\_ronson\\_strange\\_answers\\_to\\_the\\_psychopath\\_test.html](http://www.ted.com/talks/lang/ja/jon_ronson_strange_answers_to_the_psychopath_test.html))

31) Giannini, Natalie Renee., *Serving at the Pleasure of the Queen: Staging Counsel in Elizabethan England*, (2010). CR||661||2

32) Bahr-Evola, Amanda J., *Reading the terror over tea: Reflections of British nationalism in the guillotine's blade, 1793-1795*, (2010). CR||661||2

33) Pruitt, Anna, "Beware of trusting feigned beggars or fawning fellows": *Autolycus, dramatic form, and reading practices in "The Winter's Tale"*, (2009). CR||609||2

34) O'Connor, Marie Theresa, "A little world within it self": *James VI and I's Union project and Shakespeare's visions of Britain*, (2009). CR||609||2

35) Nicholson, MaryEllen Buckley, *Like father, like daughter: The similarities between fathers and daughters in five Shakespearean plays*, (2008). CR||527||2

海中心の地理を念頭にシェイクスピアなど近代初期の劇作品や詩を解析」するもの<sup>36)</sup>

(7)「当時の官僚主義を調査し、『から騒ぎ』の秩序回復は官僚主義的で『ハムレット』は官僚主義的な監視がキーになると読み解く」もの<sup>37)</sup>

(8)「筋として大っぴらにシェイクスピア作品に登場しないアメリカや西欧とアメリカを横断する大陸間の活動が、人間の貪欲な植民地主義、拡張主義の活動として、ロンドンへの影響を通じて、間接的に描かれていることを調査」するもの<sup>38)</sup>

(9)「17世紀英国の詩と科学の関係を論考。当時の科学哲学のテキストと詩のテキストを比較し、ファンタジーの意味を哲学的に考察。シェイクスピアの普遍性を科学に求めようとするアメリカ流の研究手法の意図が感じられる」もの<sup>39)</sup>

(10)「ジャマイカのレゲー・アーティストであるボブ・マーレイの藝術とシェイクスピアの比較論考」するもの<sup>40)</sup>

がある。「イギリスの国学」という伝統的なシェイクスピア研究が忘れていたものを探り、アメリカの「レッテル貼り」の伝統によってシェイクスピアに「普遍性」のレッテルを貼るのではなく、実態に即した情報収集を重視してマイナーな文化に配慮した踏み込みの中にこそ、アメリカ的研究方法の長所が生かされ、そういう研究対象になり得る存在としてシェイクスピアの普遍性が見いだせるとも言える。

---

36) Dadabhoy, Ambereen, *Inscribing the other: The circulation of difference on the early modern stage*, (2008). CR||527||2

37) Christopher, Brandon Whiting, *"Officious men of state": Early modern drama and early English bureaucratic identity*, (2008). CR||527||2

38) Hollis, Gavin R., *The absence of America on the early modern stage*, (2008). CR||527||2

39) Clody, Michael C., *Absence and alterity: Poiesis in seventeenth-century British literature and science*, (2008). CR||527||2

40) Stoddart, Mervin, *Bob Marley's lyrics: Understanding and explaining their pedagogical value*, (2007). CR||490||1

